シーボルトの朝鮮研究
――朝鮮語関係の資料と著作に注目して

オースタカンプ・スエン

はじめに

本稿ではシーボルトの蒐集にかかる朝鮮語関係の資料とそれをもとにした著作に注目して考察を加えたいと思う。『倭語類解』と『類合』の原本がそれぞれ2010年・2012年に発見できたのみならず、ヨーロッパ各地に散在している関係資料の調査も徐々にではあるが進んでいるため、朝鮮語研究の子細が従来より明らかになりつつあると言えようが、本稿の目的は、その一端を紹介することにある。

まず、『*Bibliotheca Japonica*（日本文庫）』に実際に所収されている、あるいは所収予定のあったものに関して原資料の由来と行方について述べることとする。最後に、『日本』所載の「語彙集」における朝鮮語の出典を明らかにして、その結果をシーボルト自身の発言と比較してみる。

1．『千字文』

シーボルトが郭成章の協力を得て『千字文』を石版印刷し、1833年に『日本文庫』の第三巻として出版したことは周知の通りであるが、本稿ではまずそのもととなった原物、すなわち幸いにも今日に至るまでライデンの国立民族学博物館で所蔵されている『千字文』の刊本（整理番号：1-4334）について考えてみたい。その存在は後述の『類合』や『倭語類解』と違って以前から知られていたが、その正体が明らかにされているとは必ずしも言えない。

1833年版の標題紙に「in peninsula Kooraï impressum（朝鮮半島で印刷された）」とあるように、シーボルトによって朝鮮本かの如く扱われており[1]、またホフマン（1840：2）も同様に「das gedruckte Original［trägt］unverkennbare Spuren kôraischen Ursprungs（印刷された原文がまごうかたなく朝鮮起源の痕跡を残している[2]）」と述べている。それのみか、クラプロート宛の書翰に見られるシーボルト自身の言葉を信ずるならば、朝鮮人漂流民からもらったとのことで[3]、しからば朝鮮本であるはずだとはいうまでもないことである。が、原物を見れば明らかなように、実際には朝鮮本ではなく、朝鮮本をもとにした和刻本であることがわかる。

朝鮮本の和刻本といえば、漢文のものなら珍しくないが、朝鮮本にして一部はハングルまでも含むものが和刻本になったのは極めて稀なことであったようである。『東醫寶鑑』（但しハングルのあるのは湯液篇のみ）がその好例となろうが、『千字文』の場合にも少な

くとも二種類ある。どちらの場合にも、和刻本のもととなったのは、韓濩（1543〜1605年、号は石峯）が書いたいわゆる『石峯千字文』である。わずかにしか伝わっていない稀覯本であるせいか、シーボルトの関係で取り上げられることが皆無のようである。

その第一種とは、前間（1937：88-90）などによって夙に紹介されたもので、江戸で覆刻されるまでの経緯が述べられている延宝三年（1675）の跋を有する。シーボルトが手に入れたものの正体はまさしくこれである。内題は「千字文」とあるのみで、版心にも「千」としか書いてないが、ライデン本の題簽によれば『武州千文字』との別称もあったらしい。ただし、目録類（シーボルト・ホフマン1845：20, 330番；セリュリエ1896：29, 98番）ではいずれも『千字文大本』となっており、一定しない[4]。

第二種は、見返しに「朝鮮國韓護書／朝鮮千字文／書林　赤松閣藏版」、刊記に「大阪書林／順慶町心齋橋角　河内屋茂兵衛／四軒町　千草屋新右衛門求板」とある陰刻のものである。刊年は明記されていないが、赤松閣の主人であった平瀬徹斎（通称は千草屋新右衛門）が活躍していた18世紀中頃のものとみられる[5]。イギリス人宣教師メドハーストが、のちシーボルトの所蔵となった『倭語類解』を『朝鮮偉國字彙』（1835年刊）とてバタヴィアで石版印刷する際、その附録としたものもこれである。

さて、シーボルト・ホフマン自身も後になって認めているように[6]、和刻本である原物にも既に無数の誤りが存在するが、原物と1833年刊の翻刻本とを対照すれば、やはり後者に見られる誤りのほとんどすべてが前者の誤りを引き継いだものであるのに対して、新たに生じた誤りは僅かにしかないことがわかる。そういう誤りの中で特に目立つのは、ハングル音節の脱落であるが、シーボルト旧蔵の和刻本と実際の朝鮮本を比べてみれば[7]、前者には（音節数でいうと）朝鮮語の三分の一もその姿を消しており、翻刻本でもまた同様であることがわかる。

前述のごとく、朝鮮人漂流民からもらったはずのない和刻本であることが確実であるが、最近になってブランデンシュタイン家所蔵文書の中から、やはりそうでないことを証明する手稿が見つかった。それは『日本文庫』の第３巻・第４巻をラテン語で解説したもので、シーボルト（1841：6-8）や『日本』（Ⅶ：10-11）の文章と重複するところが多い[8]。この手稿では、『千字文』の由来を述べるところで朝鮮人漂流民への言及は一切なく、通詞の名村三次郎からもらったと明記している。ただし、名村は朝鮮から手に入れたものとも述べられており、これもまた真実として認めがたいところである。ともあれ、シーボルト自身はそう信じていた可能性は十分あるであろう。

２．『類合』

続いて1838年に『日本文庫』の第４巻として出版され、また翌年刊の第７・８分冊という形で『日本』にも所収された『類合』である。その原本の由来についてはシーボルトは次のように述べている。

> “Das oben gegebene Wörterverzeichniss war bereits zum Drucke befördert, als uns das gegenwärtige *Luí hŏ*, eine bei weiten vollständigere Sammlung kôraischer Wörter durch

Freiherrn von SCHILLING-CANSTADT mitgetheilt wurde. Dieser verdienstvolle Gelehrte hatte das Buch von seiner Reise, welche er auf Befehl der Kaiserlich Russischen Regirung in 1832 nach Kiachta unternahm, mitgebracht. Er verdankte es dem Pater HYACINTH, Archimandrit der Mission zu Peking, der es daselbst von kôraischen Gesandten erhalten hatte.”（*Nippon* VII: 61）

「本語彙集よりはるかに多くの朝鮮語を集録した現在の『類合』がシリング＝カンシュタット男爵の手でわれわれに伝えられたのは、本語彙集がすでに印刷に回されたあとであった。すぐれた業績を残したこの学者は、ロシア帝国政府の命令で一八三二年にキアフタへ旅行したさいに、一冊の書物を持ち帰った。これは、北京宣教師会の管区長ハシント神父が北京の朝鮮使節からもらったものをさらに男爵が譲り受けたのである。」（尾崎1978：98）

かくて、『類合』の由来に関しては『千字文』よりも遥かに詳しく知られているわけであるが、原物は『千字文』と違ってライデンに伝わっておらず、長らく行方不明となっていた。幸いなことに、2012年にオーストリア国立図書館の所蔵となっている朝鮮語関係資料を調査する際、思いがけず発見できたので、ここで紹介しておく。

実際には、エントリヒャーの目録（1837：136）にも144番として既に出ているものではあるが、「Koreanisches Vocabular. *1 Heft in 8°*.（朝鮮語彙集、一冊、八つ折本）」とあるのみで、同じくその目録に出ているシーボルト旧蔵の和本などと違って題名は示されていない。その理由は必ずしも明らかではないが、次の事実が関係しているように思われる。すなわち、漢籍などの場合には、漢語の研究にも努めていたエントリヒャーの自力でも目録の作成が可能であったかも知れないが、和本に関する記述はシーボルトの書目をほぼそのまま書き写したものに過ぎないのである。そして、オーストリア国立図書館のアーカイブとブランデンシュタイン家所蔵文書にそれぞれ伝わっているその書目を見てみると、143番や145番に当たるものはあるが144番にあたるものがない、という点に気づく[9]。つまり、シーボルト旧蔵の和本と違って記述の拠り所がまったくなくて、そのため題名も挙げずに「朝鮮語彙集」というごく簡単な記述に留めざるを得なかったと考えてよかろう。

それはともかく、確かなのは、シーボルトのものと共にもともと和書コレクションに入っており、Jap. 119という整理番号が付いていたのに、20世紀のいつか、和本でないためか、和書コレクションから除外されて、どこの特定のコレクションにも入っておらず整理番号さえないまま書庫に眠っていたことである。ちなみに、最近になってようやくSin 7-Cという新しい整理番号を与えられ、今回は漢籍コレクションに入ってしまっている。

巻首にやはりシリング・フォン・カンシュタットの自署があるが、シーボルトの書目に出ていないところを合わせて考えてみると、国立図書館に入るまでは依然として男爵の所蔵にあり、結局シーボルトが所蔵者であった時期がなく男爵から借りていたに過ぎないかと思われる。とは言え、Sin 7-C が1838年の石版本の原本であることは次のような対応例を考慮に入れれば、疑う余地もないであろう。ともに『類合』で版木の摩耗などによってハングルの一部が脱落したのを反映しているものである。

	原本	石版本	正→誤
彼 피 (十四ウ)	彼 피	괴彼더	피→괴
訪 방 (十七ウ)	訪	낭訪同	방→낭
驅 구 (一九オ)	驅 물	나驅몰	구→나

3.『倭語類解』

韓日対訳辞書たる『倭語類解』は、『日本』が出版されはじめる以前にも、シーボルトが1823年に来日して間もなくその草稿が出来上がった「Einige Worte über den Ursprung der Japanesen（日本人の起源について）」という論文で既に参考図書として挙げられている。また、ボーフム大学で所蔵されている手稿（整理番号：1.145.001）によれば、『倭語類解』は「日本で二本しか存在しない」というが、本文より後に加筆されたところに「私は一本を手に入れる見込みである」ともある（5オ）。しかし、実際に手に入れたのはそれよりかなり後のことで、ブランデンシュタイン家所蔵文書によれば、数多くの和書とともにビュルガーから購入して1838年に受け取ったものの一つであった[10]。従来『倭語類解』の伝本として知られていたのは駒沢大学濯足文庫蔵本と韓国の国立中央図書館蔵本の合わせて二本のみで相当の稀覯本であるが、そのような稀覯本をどこからいかにして手に入れたのであろうかという疑問が当然出てくる。幸いにここでも『千字文』の関連で既に言及した手稿がまた貴重な情報を提供してくれる。これによれば、もと長崎の通詞仲間の所蔵であったという[11]。

次の引用からわかるように、『日本文庫』にその覆刻本を入れる予定はあったようだが、1835年末にバタヴィアに帰って行った郭成章の力無しでは不可能であった[12]。

> "Maxime dolemus, praecipuum librum Coraianum, cui Sinensis titulus »*Wei jü lui kiai*" scriptus est, sero a nobis esse cognitum, qua re impediti sumus, quominus hujus quoque exemplum exscriptum in Bibliotheca nostra Japonica traderemus."（シーボルト1841：8）
>
> 「支那の表題が「倭語類解」〔"Wei jü lui kiai"〕と書かれてある特別な朝鮮の書籍が晩く我々に認識されたのを大に悲しむのであつて、其が爲に書寫された一本をも我が日本文庫に入れられるのを妨げられた。」（吉町 1941［1977：171］）

さて、シーボルトの『倭語類解』の行方については、不明で「現在もどこかに保存されているのかどうか明らかでない」（浜田1977：204）とされてきたが、2010年にマンチェスター大学附属ジョン・ライランズ図書館の漢籍コレクションに今でも現存することがわ

かった（整理番号：Chinese 435）。

このコレクションの基層をなしているのは1901年に購入したBibliotheca Lindesiana（則ちリンゼイ卿の蒐集したもの）のそれであり、後者の漢籍と同様にシーボルト旧蔵の『倭語類解』も1895年刊の目録に記録されている[13]。更に遡れば、大英図書館の和書コレクションに伝わっているシーボルト旧蔵のものと共に、シーボルトが死去して間もなく、長男アレクサンダーが売ったものに至る。1867～1868年に亘るアレクサンダーと当時の大英博物館のやりとりを見れば、売りに出されていないものとして「a Corean Dictionary which my father had bought on his first voyage」[14]が目立つが、これは、大英博物館にではなく、同じころ『日本』の残部を買い占めたロンドンの古書籍商クォリッチを通して、第25代クローフォード伯爵、リンゼイ卿に売ったのである。

前述の『朝鮮偉國字彙』の主部をなしているのは『倭語類解』の翻刻および英訳であるが、『朝鮮偉國字彙』と後者のマンチェスター本との比較が物語るように、メドハーストが用いた『倭語類解』はやはり浜田（1977：204）説通り後でシーボルトの所蔵となったものと同一のものであった。

4.『日本』所載の「語彙集」

最後に『日本』の第２分冊（1833年刊）所載の「Wörterverzeichniss（語彙集）」とその成立過程について考えてみたい。およそ560項からなるものであるが、ローマ字篇と原文篇（漢字および仮名とハングルによる音訓）とに分けられており、前者にしかないものが多数ある。

	ローマ字篇	原文篇
番号のあるもの	453項 番号は455まであるが、393番は脱落、454番は原文篇の453番と合一[15]。	454項 番号は455まであるが、393番は脱落。
番号のないもの	111項	——

さて、ここで語彙の出典が問題となるのであるが、シーボルト自身は次にように述べている。

> "Dem grössten Theile nach sind die Wörter durch mich und meine japanischen Freunde aus dem Umgange mit Kooraïern gesammelt, welche dieselben in ihrer *Onmun*schrift mit beigefügter Erklärung durch die schinesischen Charaktere, schrieben. Einige Wörter und viele der schinesisch-kooraïschen sind aus dem erwähnten *Tsiân dsü-wên* genommen; die aus dem Vocabulaire des Herrn Klaproth füllten dabei eine grosse Lücke aus. Da wir sie jedoch, wie Herr Klaproth selbst bemerkt, weil ihre Aussprache sich auf eine Angabe in schinesischen Charakteren gründet, nicht durchgehends für richtig mögen gelten lassen, glaubten wir sie durch Cursivschrift von den übrigen unterscheiden zu müssen." (*Nippon* VII: 14)

「単語の大部分は私と私の日本の友人が朝鮮人との面談を通じて集めたものである。朝鮮人はこれを彼らの諺文で書き、それに中国文字による説明を添えた。しかし若干の単語と中国語風朝鮮語の多くは前述の『千字文』から取った。そのさいクラプロート氏の語彙集からもかなり多くの語を補足した。しかしわれわれは、クラプロート氏自身が言っているように、その発音が中国文字表記にもとづいているため、完全に正しいとするつもりはないので、それらはイタリック体によって他の表記と区別せざるをえないと考えた。」(尾崎 1978：20)

まず、ここで具体的な出典として挙げられている『千字文』と「クラプロート氏の語彙集」の役割について調べることとする。

クラプロートは三回に亘って朝鮮語の語彙集を世に出したが[16]、シーボルトが用いたのは『三國通覽圖説』の仏訳本（1832年刊）に載せてある最後のものである。イタリック体のものを数えてみると、全体として115項にわたる125語（他に今のところ不明とせざるを得ないものも２語）もあることになるが、総語数の約15％にあたる。また、その115項の内、クラプロートから取ったもの以外に何も示されていないものは103項という相当の数に登る。換言すれば、クラプロートのものは「語彙集」の五分の一近くまでも占めているのである。

因みに、1832年の彼の語彙集では『鶏林類事』所載の語彙と、それ以外のものとをそれぞれきちんと分けて提供しているわけであるが、言うまでもなく後者には「その発音が中国文字表記にもとづいている」という発言が当てはまらない。が、シーボルトがクラプロートから取ったものを調べてみると、『鶏林類事』所載のものに限られておらず、『東醫寶鑑』とか時にはウィットセン（1705）やブロートン（1804）から取ったものも多数含まれていることがわかる[17]。

	「語彙集」	クラプロート	出　典
眉毛	159b: *noun chip* 'Augenbrauen'	*noun chip* 'Sourcils'（133）	*Noonship* 'The eye-brow' （ブロートン 1804：391）
頬	158b: *spaim* 'Wange'	*spaïm* 'Joues'（134）	*Spaem* 'de Wangen' （ウィットセン 1705：52）
蠍	109c: *tsain kal* 'Scorpion'	*tsaïnkal* 'Scorpion'（128）	蝎 전갈（『東醫寶鑑』 湯液篇卷之二・十五オ）

続いて、『千字文』由来のものであるが、これもまた相当の数に登る。語数からすると、全体の33％も占めている。そして、やはり1833年版の誤りをそのまま引き受けたものが非常にたくさんある。特に注目に値するのは、シーボルトが勝手に作り出したとみられる多数の偽朝鮮語である。次のように、『千字文』の和刻本における誤りだらけの音・訓をそのまま引き受けてしまったのみならず、もとより朝鮮語として存在しないそれらを二つ並べて複合語となしたものがこれである。かような幽霊語が「言語研究者と旅行者のために」(尾崎1978：20＝『日本』Ⅶ：14) なりえず、また朝鮮語の言語資料としても何の価値もないものだとは言うを俟たない。

	『千字文』			「語彙集」		
	漢字	訓	音	番号	訓	音
雲母	雲 (二ウ)	구□ (正しくは구룸)	운	70	kûo (kû 구 + o 어)	ûn-mo (ûn 운 + mo 모)
	母 (十五オ)	어□ (正しくは어미)	모			
海堂	海 (三ウ)	바□ (正しくは바다)	히	116	dsîppa (dsîp 집 + pa 바)	hai tang (hai 히 + tang 당)
	堂 (十オ)	집	당			
生善(ママ) (生姜)	生 (二ウ)	날	싱	135	nalô (nal 날 + ô 어)	saing-siê (saing 싱 + siê 셔)
	善 (十ウ)	어□ (正しくは어딜)	셔 (正しくは션)			

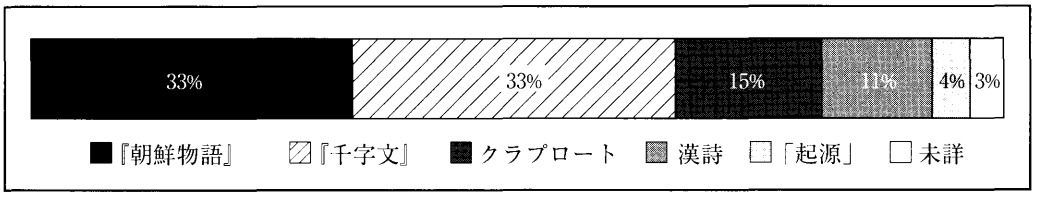
さて、クラプロートと『千字文』由来のものを除外すれば、残りはすべて「私と私の日本の友人が朝鮮人との面談を通じて集めたもの」ということになるはずだが、いかがであろうか。

夙に新村（1929：3など）によって指摘されている通り、上記の両者以外に、シーボルトの朝鮮記述にとって重大な役割を果たしている『朝鮮物語』も深く関係している。しかし、拙稿（2009）でも些か述べたように、298項にわたる『朝鮮物語』巻五所載の「朝鮮の國語」[18]をそのまま『日本』の「語彙集」に転載したと見るのは妥当ではなく、どちらかと言えば、『朝鮮物語』をその出発点としながらもいろいろと手を入れたものを用いたとしなければならない。「朝鮮の國語」にはハングル表記がいっさいなく、朝鮮語もすべて仮名のみで、しかも伝写の誤りなどのせいで元の朝鮮語を同定するのが不可能となっているものもいくつか含まれている。従って、それを「語彙集」に見られる形に書き直すためには朝鮮語とハングルに関する相当の知識がなければならない。そういう知識を備えた者にして早くからシーボルトと交際していた人物と言えば、対馬の朝鮮語通詞を除いてはいい候補はまずないであろう[19]。朝鮮語の日本資料によく目にする問題点がここにも同様に現れているところを考え合わせれば、その蓋然性が一層高くなる。要するに、少なくとも間接的には確かに「朝鮮人との面談」によるものと言えそうだが、シーボルト自身の力だけでは到底可能でなかった作業なので、「私の日本の友人」の関与が示唆される。

『朝鮮物語』がもととなったものがどれほど『日本』の語彙集に載せてあるかを計算してみると、『千字文』の場合と同様に33％ということになる。量的にいえば主な出典は以上ですべてであるが、そのどちらでも説明がつかないものがまだ残されている。今までの調査で更なる出典として明らかになったのは次の二点である。

・朝鮮人に書いてもらった漢詩につけてある、ハングルによる音訓（『日本』の第２分冊に所収）＝11％

・「日本人の起源について」（1824年成る）の語彙表などにおいて既に学界に知らせたもの＝４％



結局、シーボルト自身が「朝鮮人との面談を通じて集めたもの」と言えるのは僅かに漢詩のものだけで全体的にみて11％と極めて少ない、ということになる。それ以外は、直接書籍に基づいたものか、同じく書籍に基づくものでも朝鮮語通詞などの協力を得て改編してもらったもののどちらかである。

今後の課題として残されているのは、ライデン、ウィーン、ボーフム、ベルリンなどに散在する、「語彙集」の成立過程を物語る資料の詳細な調査である。今まで確認できた主なものは次の①～⑥である。

『朝鮮物語』の「朝鮮の國語」
ライデン本
（朝〔かな〕・日、298 項）

→ **「朝鮮の國語」を蘭訳したもの**
① ボーフム、1.286.000
（朝〔カナ〕・日・蘭、295 項）

↓

「朝鮮の國語」を改編したもの
② Br. 家所蔵文書、K-3 Fa-L 49
（朝〔カナ・諺文〕・日・蘭、303 項）

→ ③ Br. 家所蔵文書、Nr. 24, 7-13
（朝〔カナ・諺文〕・日、300 項）

→ ④ Br. 家所蔵文書、Nr. 24, 15-22
（朝・日・独、293 項）

→ **『朝鮮辭書全本』**
⑤ オーストリア国立図書館、Cim. Jap. 15（副本）
ライデン（原本、未見）（朝、300 項）

↓

改編したものを大幅に増補したもの
⑥ Br. 家所蔵文書、K-3 Fa-L 50
（独・朝・日、約 570 項）

↓

『日本』所載の「語彙集」
（独・朝・日）

⑥は『日本』所載のものに近いのに対して、①～⑤ではまだ「朝鮮の國語」の原形をよく反映している、それ以前の段階のものである。①は、「Einige Kooreische Worte（若干の朝鮮語彙）」と題して「朝鮮の國語」をほぼ全面的に写してオランダ語の対訳を付け加えたものであるが[20]、朝鮮語は依然として仮名表記しかなく、『日本』の語彙集のようにハングルに書き直したものではない。最近、コンスタンティン・フォン・ブランデンシュタイン＝ツェッペリン氏のご指摘で明らかになったように、シーボルト自身が門人論文に数

えていたものの一つである[21]。

②は、門人と言えるかどうかは不明だが、朝鮮語通詞が書いたと思しきものである。「朝鮮の國語」の難解なものは書き直されており、また全項目に亘って朝鮮語のハングル表記もある。最後に数字の「一」「二」「三」（三つとも重複）「億」「兆」が追加されている。更に、オランダ語の対訳も悉く書き加えられているが、別人によるものかも知れない。

③は途中で作られた②の写しと見られるが、オランダ語もまったくないのに加えて、②では後になって消された項（「江戸」「大坂」「兄弟」「孫」「計」「貞」「押」の合計７項）も依然として残っている。④は朝鮮語の仮名表記を消してハングル表記のみを残し、更に対訳をドイツ語に直して（ただし『日本』所載のそれと異なるものも少なくない）できた浄書のものである。「億」「兆」はあるが、②で消してある７項がすべて除外されている。⑤も②に基づいたものであるが、見出しの漢字とそれにあたる朝鮮語の音訓のみを取って清書したものである。②で消してあるものの一部は（「江戸」「大坂」「計」）除外されている。また、ハングルの音節表や漂流民の漢詩なども合わせて載せてある。

⑥では結局オランダ語がドイツ語に取って代わられ、『日本』にあるものと同様に日本語の音訓が増補され、そして朝鮮語・日本語のローマ字表記も付け加えられている。『千字文』などによる増補がなされたのもこの段階においてであった。

註

1　他にも書翰類などに同様な発言がいくつか見出される。例えば「Ich besitze unter andern ein Chinesisch Koreisches Wörterbuch, in Korea gedruckt, eine herrliche Ausgabe!」（1830年10月９日）や「Mehrmals habe ich zu Nagasaki schiffbrüchige Kooraier kennen gelernt, und diese haben mir unter andern einen in Koorai gedruckten Wortschatz mitgetheilt.」（1832年８月19日、ともにクラプロート宛、ヴァルラーヴェンス2002：97, 98を参照）などがこれである。『千字文』と明記されているわけではないが、その石版本を出した直後に「ein schinesisches und Kooraisches Wörterbuch」（1834年２月２日、ネース・フォン・エーゼンベック宛の書翰、ベルリン国立図書館所蔵）といった言い方もしているため、これらもまた『千字文』を指すものに他ならないであろう。

2　和訳は尾崎（1978：248）による。

3　脚注１を参照。先行研究でも例えば高（1989：24）では「이 책은 이미 언급한 漂着民으로부터 받은 선물임에 틀림없다（この本は前述の漂着民からもらった贈物であるに違いない）」とされている。

4　ライデン本以外に、東洋文庫（前間恭作旧蔵本）、東京大学（黒川真頼旧蔵本か）、奎章閣（但し跋を欠く）にそれぞれ一本が所蔵されているようであるが、ともに未見。

5　メドハーストが用いたのは、その当時、1826年までオランダ商館長を務めたデ・ステュルレルの蔵書であり、後にフランスの国立図書館の所蔵（整理番号：Japonais 369）となったものである。これ以外に、関西大学（内藤文庫）や東京都立図書館（安藤正次旧蔵本）にもそれぞれ一本があるようである。

6　シーボルト（1841：7）やシーボルト・ホフマン（1845：20, 330番）などを参照。

7　本稿で用いたのは奎章閣所蔵のもの（整理番号：奎9801）である。

8　ブランデンシュタイン家所蔵文書のB-3 Fa-C 27（44オ）、B-3 Fa-C 28（55オ）を参照。

9　前者は未見であるが、トート（2011：13）によると、エントリヒャー目録の135、141、142、144、154番にあたるものはないという。ブランデンシュタイン家所蔵文書に伝わっている目録（B-4 Fa-K 266）も同様である。

10 ビュルガーコレクションの目録（K-3 Fa-H：8-21）の71番を参照。

11 ブランデンシュタイン家所蔵文書のB-3 Fa-C 27（47ウ）、B-3 Fa-C 28（57ウ～58オ）を参照。

12 帰国との関係についてはブランデンシュタイン家所蔵文書のB-3 Fa-C 27（47ウ）、B-3 Fa-C 28（57ウ）をも参照。また、帰国の時期に関しては、シーボルト（1841：4）によれば1836年のことというが、ここでは、「今月出帆した」とある1835年11月25日付けのホフマンの書翰（ブランデンシュタイン家所蔵文書、B-4 Fa-K 259）に従って1835年11月とする。

13 エドモンド（1895：65）の435番を参照。現在の整理番号はこれをそのまま受け継ぐ。

14 フリーゼ（1983：97）より再引用。ただし、ビュルガー由来のものであるにも拘らずアレクサンダーのように「第一次滞日中に購入した」とするのはもとより正しくない。

15 他に169番を179番に誤り、174番を間違って163番の次に入れている。

16 オースタカンプ（2009：189）を参照。

17 因みに、クラプロートがサンクトペテルブルク滞在中参考にしていた『東醫寶鑑』もまた朝鮮本ではなく、中国の覆刻本であったことがほぼ確かである。前述のように和刻本もあるのだが、日本・中国の覆刻本ともにハングルに誤りが多くて、朝鮮語の資料としては問題がある。

18 박（2005）などによって明らかにされているように、『朝鮮物語』の朝鮮語彙集は、『異國旅硯』所載の「韃靼北京朝鮮三國通用詞の事」と『和漢三才圖會』巻第十三所載の「朝鮮國語」とを合わせたものに他ならない。つまり、内容的には、シーボルトの時代でも既に百年以上前のものとなっていたのである。

19 インフォーマントとしての朝鮮語通詞については、早くも「日本人の起源について」（表の凡例など）や『日本』（Ⅶ：7, 9）に言及がみられる（オースタカンプ2009：192を参照）。

20 ただし、ここでは『朝鮮物語』の「旦（あした）」「明（あくる）」「塩（しほ）」の３項にあたるものがないため、合計295項となっている。また、読みやすさを目指してか、もとの平仮名を片仮名に書き直してそして順番も自由に変えている。オースタカンプ（2009）をも参照。

21 ブランデンシュタイン家所蔵文書に伝わっている門人論文の目録「Literarische Beyträge meiner Japanischen Freunde」（K-5 Fa-E 93）を参照。「若干の朝鮮語彙」の表紙に「no 36」と番号がついているが、やはり目録にある通りである。

参考文献

ヴァルラーヴェンス＝Walravens, Hartmut（2002）: *Julius Klaproth (1783-1835). Briefwechsel mit Gelehrten, großenteils aus dem Akademiearchiv in St. Petersburg.* Wiesbaden: Harrassowitz.

ウィットセン＝Witsen, Nicolaes（1705）: *Noord en Oost Tartarye, ofte bondig ontwerp Van eenige dier landen en volken, Welke voormaels bekent zijn geweest. Tweede Druk.* Amsterdam: François Halma.

エドモンド＝Edmond, John Phillip（1895）: *Bibliotheca Lindesiana. Catalogue of Chinese books and manuscripts.* Privately printed.

エントリヒャー＝Endlicher, Stephan（1837）: *Verzeichniss der chinesischen und japanischen Münzen des k. k. Münz- und Antiken-Cabinetes in Wien. Nebst einer Übersicht der chinesischen und japanischen Bücher der k. k. Hofbibliothek.* Wien: Beck'sche Universitäts-Buchhandlung.

オースタカンプ＝Osterkamp, Sven（2009）: "Selected materials on Korean from the Siebold Archive in Bochum – Preceded by Some General Remarks Regarding Siebold's Study of Korean". In: *Bochumer Jahrbuch zur Ostasienforschung* 33: 187-216.

尾崎賢治（訳）（1978）『日本』第五巻．東京：雄松堂書店．

クラプロート＝Klaproth, Julius（1832）：三國通覽圖説 *San kokf tsou ran to sets, ou aperçu général des trois royaumes.* Paris: Oriental Translation Fund.

高永根（1989）「지볼트（Fr. von Siebold）의 韓國記錄 研究」『東洋學』19：1-64.

シーボルト＝Siebold, Philipp Franz von（1841）: *Isagoge in Bibliothecam Japonicam et studium literarum japonicarum.* Lugduni-Batavorum: apud auctorem.

——；Hoffmann, Johann Joseph (1845): *Catalogus librorum et manuscriptorum Japonicorum a Ph. Fr. de Siebold collectorum, annexa enumeratione illorum, qui in Museo Regio Hagano servantur.* Lugduni-Batavorum: apud auctorem.

新村出 (1929)「和蘭ライデン大學訪書誌」『書物禮讃』9：1-4, 7.

セリュリエ＝Serrurier, Lindor (1896): *Bibliothèque japonaise*. Leiden: E. J. Brill.

トート＝Tóth, Veronika V. (2011): *Ausgewählte Japonica in der Österreichischen Nationalbibliothek*. Seminararbeit, Universität Wien.

박정자 (2005)「『朝鮮物語』의「朝鮮の國語」에 대하여」『日語日文學研究』54：159-178.

浜田敦 (1977)「近隣諸国に関する情報：朝鮮」岩生成一 他 編『シーボルト「日本」の研究と解説』東京：講談社, 198-207.

フリーゼ＝Friese, Eberhard (1983): *Philipp Franz von Siebold als früher Exponent der Ostasienwissenschaften.* Bochum: Studienverlag Brockmeyer.

ブロートン＝Broughton, William Robert (1804): *A voyage of discovery to the North Pacific Ocean.* London: T. Cadell & W. Davies.

ホフマン＝Hoffmann, Johann Joseph (1840): *Das* 千字文 *Tsiän dsü wen oder Buch von tausend Wörtern, aus dem Schinesischen, mit Berücksichtigung der koraischen und japanischen Übersetzung, ins Deutsche übertragen.* Leiden.

前間恭作 (1937)『朝鮮の板本』福岡：松浦書店.

吉町義雄 (1941)「施福多「日本文庫及日本文學研究提要」(前)」『文學研究』30.〔吉町義雄 (1977)『北狄和語考』東京：笠間書院, 155-182に再収録〕

（すゑん　おーすたかんぷ・ボーフム・ルール大学）